AJEQ NEWSLETTER 2012年ケベック選挙特集号



©日本ケベック学会 Association japonaise des études québécoises

特別編集号 2012年10月5日発行

2012年9月4日のケベック州議会選挙

この日はケベック主権派にとって、記念すべき歴史の一ページとなりました。9年にわたる野党時代の後、ケベック党 (PQ) が再び州の第一党に選ばれたのです。とは言え、議席の過半数を獲得するにはいたりませんでした。ラジオ・カナダが発表した選挙結果は次の通りです。ケベック初の女性首相となるポーリーヌ・マロワ率いるPQは、本選挙最大の54議席を獲得(得票率は全体の31.9%)しました。一方、PLQも50議席を獲得(31.2%)し、僅差でPQに迫りました。その他、ケベックの未来連合党(CAQ)が19議席(27.1%)、連帯ケベック党(QS)が2議席(6%)を獲得しました。州議会におけるマロワの前任者であり、PLQ党首であるジャン・シャレは自らの選挙区で落選、政治からの引退を表明しました。

このニュースを受けて、AJEQではブログとニュースレターで特集を組むことにしました。特集は、ケベックと日本の会員による選挙そのものに関するトリビューンおよび、「ある視点」と題した論評で構成しています。

〈本ニュースレターの内容〉

- ・州選挙概観(フランソワ・エベール)
- ・ケベック党が直面する課題―学生デモが訴えること(荒木隆人)
- ・ケベック党は本当に『少数派』与党なのか一注目されるCAQの存在(仲村 愛)
- ・市場原理批判を表明した票―そして、ケベック社会の未来(小畑精和)
- ・〈ある視点〉ケベック党とスコットランド党―少数民族国家主権派の系譜と今後の住民投票の展望(陶山宣明)

写真については左から、ケベックの新聞記者の親友が提供してくれた 「9月4日夜、新首相ポーリーヌ・マロワ勝利の瞬間」の写真。©Jean-François Nadeau@Le Devoir, Montréal, Québec. 中央は小畑会長が2012年3月21日にケベックシティーで撮影した「州議事堂前で座り込みをする学生たちとその横断ビラ」(ビラの文句は「警棒は我々を黙らせない」)。右は同じく小畑会長が7月の「フランス語国際フォーラム」に出席の際撮影した「ケベック国際会議場前でシャレ政権の言語政策に抗議するナショナリストのプラカード」(ケベックの青い旗の隣のプラカードの最初の文句は「連邦に取り込まれた嘘つきシャレ」)。

州選挙概観

フランソワ・エベール

まず巻頭には、フランソワ・エベール会員がモントリオールから寄稿された、今回の選挙とその政治的文脈についての概観を掲載したいと思います。以下は日本語訳ですが、フランス語の原文を参照されたい方はAJEQブログ資料集「特集一ケベック州議会選挙解説と雑感一意見1」をご覧ください。

http://ajeq.blog.so-net.ne.jp/2012-09-14



(今年4月、立教大学で講演中のエベール会員)

2012年9月4日にケベック州総選挙が行われ、中 道左派で独立派のケベック党が9年ぶりに政権に返 り咲いた。今年のケベックの春は、詩人気取りの ジャーナリストたちが「アラブの春ならぬエラブ ル (メープル)の春」と語呂を合わせて呼んだよ うに、動乱の季節だった。3月に始まった学生たち の街頭デモは、ひるがえるバナーと騒々しいマ ナーのもと、100日以上続いた。ケベック党は勝利 したとは言え、議席の過半数を獲得するにはいた らなかった。つまり、公約したプログラムを実行 するのは至難の業になるということだ。特に、ケ ベックが主権を獲得するための道程は厳しいもの となるだろう。

ケベック主権派は、これまでルネ・レベック、 ピエール・マルク・ジョンソン、ジャック・パリ ゾー、リュシアン・ブシャール、ベルナール・ラ ンドリー、アンドレ・ボワクレールといったリー ダーに導かれてきた。今回初めて女性リーダーが現 れた。ケベック州の未来は彼女の肩にかかってい る。新首相ポーリーヌ・マロワは閣僚としての長 い経歴を持っている。それだけに、二大野党に簡 単に操られることはないだろう。今回野党にま わったのは、個人的に支持率を失ったジャン・ シャレ率いる自由党と、かつて独立派の中心人物 であったフランソワ・ルゴー率いる「ケベック未 来連合(CAQ)」である。一方、ケベック党に連 なる分離主権派の第二党として「ケベック連帯 党」がある。同党は議会に2議席を獲得し、多くの 選挙区で高い得票率を記録した。ケベック党が絶 対多数派与党にはならなかったのは、そのせいで もある。

マロワ首相の勝利が確定した夜、モントリオール市内に集まった親マロワ派を狙った発砲事件が起こった。その巻き添えとなって一人の技術者が死亡、もう一人が重傷を負った。事件の様子はラジオ・カナダのカメラマンによって最初から最後までフィルムに収められた。残された映像によれ

ば、犯人はがっしりした50歳代の男で、覆面をし、ガウンのようなものを羽織っていた。この男は首相の勝利演説が行われているホールのドアの前に集まった人々に向けて発砲し、その後建物に火をつけようとした。しかし、発砲から2分もたたないうちに警官によって取り押さえられた。男の名前はリチャード・ベイン。取り押さえられたがら、英語なまりのフランス語で「英系カナダ人が目を覚ますぞ!」と繰り返した。もし、彼の抱えていたライフルの安全弁が外されていて、彼が取り押さえられることなくホール内に侵入していたとしたら、そこでどのような惨劇が繰り広げられたことか、想像にあまりある。

この事件について、「ベインは狂人か、それともテロリストか?」、または「彼がこんな行動に出たのは一体誰の責任か?」といった議論が盛んに行われている。選挙キャンペーンの間、激情的なスピーチと党派的な政情分析で大衆を翻弄した政治家とメディアの責任だと言う人もいる。こうした偏った言説はフランス語系と英語系住民の間の敵対関係に火をつけ、ひいてはケベックの独立支持者の主張と彼らが3回目の州民投票を望んでいることを絶対悪とする傾向を助長させた、と言うのである。一方、ベインはただの偏執狂にすぎないと考える人々もいる。

ベインの行動と意図がどれほど現実の問題と関わっていたか、あるいはどれほど非現実的な妄想に従っていたか、それはともかく、彼が20丁ほどの銃器を自宅に保持し、発砲事件の晩はそのうちの5丁を身につけていたことは確かである。この事件は、まずもって連邦政府が廃止を目指している銃器保持管理法の緊急の見直しを要請するものである。このことだけを見ても、昔から繰り返されてきたカナダとケベックの対立が再燃するだろうと予測できる。(訳・加納由起子)

ケベックが直面する課題一学 生デモが訴えること (荒木隆人)

今回の選挙で、1968年にルネ・ レヴェックによって結成されて以 来、主権 連合を根本綱領とするケ ベック党が第一党になったのには 様々な要因が働いているだろう が、今年2月にラヴァル大学とケ ベック大学の学生組合を発端と し、労働組合や一般州民にまで拡 大した大学の学費値上げ反対運動 に対して、ケベック党が学費値上げ 凍結を公約として打ち出すことで運 動の取り込みを図ったことが大き な要因の一つであったと言える。 従って、州民は何よりもまずこの学 費問題の解決の行方を見守ること になるだろう。9月19日に発足した マロワ新政権は早くもこの問題へ の積極的な取り組みの姿勢を示し た。まず、新政権はその閣僚人事に おいて、弱冠20歳の学生運動の リーダーの一人レオ・ビュロー・ブ リュアン (Leo Bureau-Blouin) を議 会秘書官に任命し、次に、政権発 足初日となる20日には、大学の学 費値上げに関して、今年度 (2012-2013年) は値上げを実施せ ず、その後の年度については今後開 かれる予定の教育問題についての 頂上会議での討論の結果に委ねる ことを約束した。

ケベック党の根本綱領である主 権連合構想の実現についてはどのよ うに考えられるだろうか。少数与 党政権である現在では、主権につ いての州民投票(レフェランダム) の実施はすぐには困難であろう。 他の政党との主権獲得に関する協 力の可能性についてはどうであろ うか。今回の選挙で19議席を獲得 し、第三党となったCAQ(ケベック の未来連合)は、ケベックの主権獲 得よりも小さい政府を目指すとい う経済政策の方に強い関心をもつ 政党である。むしろ、主権獲得に ついてケベック党と協力する可能 性があるのは、第四党である中道 左派で主権ケベックを主張する QS(ケベック連帯)の方である が、獲得議席数が2議席ということ を考えると、ケベック党の54議席 と合わせても、州議会で過半数に 届かない規模である。加えて、昨 年8月に実施された世論調査(the Leger Marketing Poll) によれば、ケ ベックの主権獲得を望む州民は全 体の24%にとどまるとされてい る。従って、ケベック党にとって、 主権連合構想は根本綱領であるに は変わりはないとしても、学費問 題解決を含む今後の難しい政策運 営を切り抜け、州民の支持を強固 にすることが先決の課題となる。 とはいえ、主権連合構想を将来的 な目標とする政党の政権復帰が、 今後のカナダ政治に大きな影響を 与えるようになるだろうことは否 定できないだろう。

ケベック党は本当に「少数 派」与党なのか一注目される CAQの存在(仲村 愛) ポリーヌ・マロワ首相率いるPQ が少数派与党である点を強調する メディアは多い。PQは過半数の63 議席に届かず、最大野党となった PLQとはわずか4議席の差しかない からだ。「世界中で最も支持率の 低い政権」といった表現さえ散見 された。

だが本当にPQの支持率は低いのだろうか?確かに、PQとPLQの獲得議席数を見れば、PQはいかにも辛勝という感じである。得票率でいえばわずか31.9%。州民の3割にしか支持されていない与党というわけである。

だがちょっと待ってほしい。PQ以下各党の得票率を見てみたい。PLQ31.2%、CAQ27.1%、QS6%、その他3.9%となっている。この数字が表すのは、PQの獲得票の少なさよりも、むしろ2011年11月に誕生したCAQの躍進ぶりである。議席数ではPQとPLQに対してそれぞれ30議席もの差があるにもかかわらず、得票率で言えば、CAQは両政党に対して4%台の差しか許していないのだ。

得票率が必ずしも議席数に反映されないのは、ケベック州の選挙制度が小選挙区制だからだ。全州125の選挙区からそれぞれ当選できるのは1人のみ。この選挙制度は、当選者の確定が容易だが死票が多いというデメリットがある。なぜなら、その選挙区内で相対的に獲得票数が一番多い候補者が当選できるからだ。接戦であればあるほど死票が増え、民意が反映されないことになる。

選挙区ごとに結果をみれば、モントリオール都市圏では、かなりの選挙区でPLQが他に追随を許さない形で自星を飾っている。だが、それ以外の地域で PLQが当選した選挙区ではむしろ、PLQとCAQの接戦、或いはそれにPQを加えた三つ巴の戦いであったことが伺える。CAQ、惜しくも当選まであと一歩届かず一そんな選挙区が州全体のあちこちで見受けられるのだ。もし比例代表制だったならば、CAQの獲得議席数はもっと多かったに違いない。

もともとCAQは元ケベック党員 (ペキスト)のフランソワ・ルゴー氏 が結成した政党。昨年PQを離党し た多くの政治家はCAQへ移籍し た。つまり、PQの「少数派与党」 は、PQの支持票の多くがCAQへ流 れた結果なのである。とすれば、 「分離・独立派」の勢いはむしろ強 まっているのではないか。CAQの 今後の動きに注目だ。(仲村 愛)

市場原理批判を表明した票ー そしてケベック社会の未来 (小畑精和)

9月4日に行われたケベック州議会 選挙では、これまでの「主権派」か 「連邦派」かという対立軸に加え て、「市場原理」がどこまで優先さ れるのかも問われた。

総議席数125のうち、主権連合派のケベック党(PQ)が54議席 (得票率は31.94%)を獲得して第一党になったが、少数与党である。政権与党だったケベック自由党(PLQ)は50議席 (得票率31.21%) にとどまり、現首相のジャン・シャレ氏も落選した。昨年誕生した新政党の「ケ

ベックの未 来連合」Coalition Avenir Québec (CAQ)は19議席(27.06 %)。緑の党のケベック版「ケベッ ク連帯Québec Solidaire」が2議席 (6.02%)。

PLQは汚職まみれでいやだけど、ケベックの「独立」も不安だし、かといって、第三極のCAQもまだ未知数だし...といったとまどいもあろうが、この選挙結果は「新たな争点」に対するケベック州民のためらいの反映でもあろう。

今回の選挙では、市場原理をどこ まで優先させるのかも問題になって いた。ケベックでは今年学費値上げ 反対の学生運動が広がり、ストやデ モが大規模に 展開されてきた。3月 22日にはモンレアルで20万人のデモ 参加者を数え、この数字はケベック 史上最大と言われている。ことは単 なる学費値上げ問題から、「市場原 理至上主義」批判へと広がっていっ た。PLQ政府はデモやピケなどを規 制する78号法(のちに12号法)を州 議会で可決させて対抗した。これに 対 して多くの教員組合、PQは学生 支持を表明していた。汚職疑惑だけ でなく、若者の支持を失ったことも シャレ政権敗北の原因の一つだった のである。

学費値上げに代表されるように、PLQはケベック社会をより市場原理に委ね、州政府の負担を軽くする方向に舵をとろうとしてきた。今回の選挙結果はその方向に州民が疑義を挟み、PQが一応勝った形になったが、第三党のCAQは「市場原理」優先でPLQに近く、「大きな政府」志向を州民が支持したともいえない。

また、PQはPLQがフランス語を 十分に擁護していないとして、フラ ンス語憲章の適用強化を主張してい る。この点でもCAQはPLQに近い立 場である。

マロワ新首相は学費値上げの撤回、12号法の廃止を早々に宣言した。しかし、PQも過半数をえたわけではなく、連立を組むCAQは学費値上げ賛成であり、新政府の前途は多難である。確かに、学生や労働組合はPQの勝利を歓迎しているし、党首のポーリーヌ・マロワはケベック史上初の女性首相になる。しかし、勝利の高揚はなく、Le Devoir紙の世論調査によると、有権者の48%が今回の選挙結果を不満に思っている。学生団体もPQが学費値上げ撤回を実施できるのか注視している。

また、勝利直後のマロワ党首が演説中にPQの集会が暴漢に襲われ、一人が射殺され、一人が負傷した。犯人は多くの銃器を所有していたという。そのため、銃規制強化も浮上してきており、規制を弱めようとする連邦政府と対立する問題が一つ増えることになる。

今後ケベック社会はどういう方向 に進んでいくのだろうか。10月6日 の大会でDenise Daoust UQAM名誉 教授が「フランス語憲章」について 講演してくださる。また、12月に は、Gérard Bouchard UQAC教授が来 日する。両教授が今回の選挙結果を どのようにとらえ、ケベックの未来 をどのように考えているのか、今か ら講演を聞くのが楽しみである。



シャレ内閣の言語政策に抗議する集会。2012年7月3日、第一回世界フランス語フォーラムが開催されていたケベック国際会議場前で。 撮影®小畑精和

〈ある視点〉

ケベック党とスコットランド党―少数民族国家主 権派の系譜と今後の住民投票の展望(陶山宣明)

過去の2回の政権奪取時(1976年と1994年)において、ケベック党(PQ)は6割を超える議席を確保した。今回少数派となったマロワ政権は心もとない船出を余儀なくされている。PLQとCAQが協力すればいつでも不信任案は成立し得る状態にあるため、早い段階で結果を出して州民の支持を着実に高めて行く必要がある。まず、野党にも受け入れられる範囲で、且つ、右寄りの前政権とは差異が認められる形で、経済、社会政策面の実績を上げることが問われる。州民投票を行なうことを選挙時に公約した後で実践したレベックやパリゾーとは全く違う立場にある新首相は、そもそもの党是であるケベックの主権を直ちに州民に問おうとすれば必然的に議会解散が待っている。

PQの現在の状況を、よく似た性格を持つスコットランド国民党(SNP)と比較してみたい。SNPは、連合王国から脱退してスコットランドに主権を回復する目標を掲げて結党されてから既に78年も経ち、1960年代に生まれたPQよりも長い歴史を誇っている。しかしながら、SNPはここ10年来、PQの経験から多くを学んでいる。歴史をたどれば、18世紀初頭からスコットランド人にとってもウェストミンスターこそが議会であったし、単純小選挙区制で2大政党制が確立している英国では、小政党は苦戦を強いられるのが常であった。SNPが

通常選挙で議席を取れたのはやっと1970年のことである。1974年に最高11議席まで増やせたが、スコットランドの選挙区中の15.5%を占めただけであり、議会全体だとたったの1.7%でしかなかった。しかし、ブレア労働党政権下で復活したスコットランド議会では、最初の選挙でいきなり第一野党に躍り出た。2007年には早くも政権の座に就き、党首サモンドは自治政府首相に就任した。2011年、小選挙区比例代表併用制下では困難な過半数議席獲得を実現したSNPは、選挙公約どおりにスコットランド独立の是非を問う住民投票を実行する見込みである。

住民投票はケベックより一足先にスコットランドで行われそうだが、予断を許さない。超国家組織欧州連合(EU)の発展のもと、人口500万人のスコットランドよりも小さな国は、欧州には数多く存在する。スコットランド人が国家内の民族として生き続ける道を選ぶか、それとも自分たちの民族国家を持って大きなフレームの中に活路を見出そうとするのか、2014年秋に結論が出る。

ケベックで3度目の州民投票が挙行される可能性は、PQが勝利の暁に実施する公約をした上で安定過半数議席を得られた時に生まれる。そのためには、社会民主党的性格を維持しながら、中道および右寄りの票をも取り込みつつ、マロワ首相が議会を解散する運びとなる。その際に、大西洋を横切った地域での運動の成否は、ケベック主権派の今後の動きに全く無関係ではあり得ないだろう。

編集後記

2012年ケベック州議会選挙の特集号となった今回のニュースレター号外はいかがだったでしょうか。ケベック主権とカナダにおけるフランス語の立場の問題は、多くの文脈で現在の世界における文化的マイノリティーの問題と重なります。ケベックの

選挙、そしてその後発生したテロ事件について、日本とケベックの間で対話が進む様子を見るにつけ、制度を超えた新しい文化、まだ形も名前も持たない文化といったものが確かにあって、その自由な未来はまだ可能なのかもしれない、という想いを禁じ得ません。(加納)



日本ケベック学会 (AJEQ)とは

「日本ケベック学会」(AJEQ)は、日本でのケベック・フランコフォニーに関する学術研究・芸術文化交流などを振興し推進する学会です。ケベックやフランコフォニーにご興味のある方の参加をお待ちしています。

学会活動の詳細は、以下のホームページとブログ をご覧ください。

HP: http://www.ajeqsite.org/index.html プログ:http://ajeq.blog26.fc2.com/

日本ケベック学会(2012年2月~)

・主要役員 小畑精和(会長) 小倉和子(副会長) 立花英裕(副会長) C. Y. シャロン(顧問)

. 広報HP担当 加納由起子 小松祐子 安田 敬 宮尾尊弘

AJEQニュースレター

年3回発行 発行人・小畑精和 編集人・加納由起子 日本ケベック学会